

広島大学 大学教育研究センター 大学論集

第24集 (1994年度) 1995年3月発行：273-291

# 私塾からの風景

—大学の原点確保の試み—

松尾欣治

## 目次

はじめに

1. 出発点としての〈大学生=奴隷〉論
2. プロセスとしての〈受験体制=幕藩体制〉論
3. 大学教育のパラダイム変換

おわりに



# 私塾からの風景

—大学の原点確保の試み—

松尾欣治\*

## はじめに

ひょんなことから、私が主宰する学生問題総合研究所に私塾が出来てしまった。私の研究所は宴会ばかりやっているので、いつの間にか研究所に集う人々が“宴会学派”と呼ばれるようになり、その宴会から江戸時代幕末の“私塾”がポンと生まれたのである。その名を「インターカレッジ 私塾“竜仙庵”」と言う。むろん、受験塾ではない。

日本に大学の原点を求めるとすれば、江戸時代の私塾あるいは藩校に行き着くのであろう。だが、そうした歴史研究に基づいて私塾を再現したのではない。議論の勢いから、私塾が誕生してしまったのである。

まず本稿で問題にしたいのは、この議論の“勢い”についてである。大学論にしろ大学教育論にしろ、大学生の側からすれば、これほど魅力のない学問はない。学歴はほんとうに有用かという議論であってさえ、睡魔と戦いつつ読み進めても、どうしても読み通すことができない。それが大方の大学生にとっての大学論というものであり、大学教育論というものである。私塾は、その魅力のない大学論（大学教育論）を俄然面白くする。

次に、私塾展開によって、いままで日本の大学教育があまりに非効率であった原因を謎として、その謎に新たな視点から照明を当てること、およびその打開策を具体的に考察することができるようになった。今回はその全体のスケッチを提出するだけであるが、これからも当分の間は、私塾の視点から、いろいろな果実が結実し続けるであろう。

その1例を挙げれば、「授業中の私語」の問題、と言うより“私語の効用”を知ったことなど、研究者の側からは想像を絶する成果となった。「授業中の私語」は分析・批判されるべき対象ではなく、その効用から大学教育を逆照射して、大学教育の在り方そのものを考え直す絶好の視点を提供する現象だったのである。

結局、私達が目指したものは大学教育の“パラダイム変換”であった。だが、いま改めて思い返せば、そのパラダイム変換の方向は、昭和30年代前半にはすでに丸山真男氏によって示されていた。『日本の思想』がその著作である。誤解を避けるために確認しておけば、丸山氏と私達の私塾展開とは、まったく関係がない。ただ現代の私塾が一応の展開を終えて、氏が前掲書で今後の課題として提出した内容に強い共感を抱いたのである。以下、本論において随時、丸山氏の表現を借りるが、それはこの共感のためと、説明を簡略にするためであることをあらかじめお断りしておきたい。

---

\* 学生問題総合研究所（大学教育研究センター客員研究員）

## 1. 出発点としての〈大学生＝奴隷〉論

大学生の大学教育に対する期待として「自分の殻を破ってくれる」という機能がある。だが、この大学教育の本来的な機能がなかなか有効に働かない。それゆえに、大学という場が大学生にとって「生かさず殺さず」の状況を呈し、その沈滞を克服しようとする者からは悲痛な「我々に活躍の場を与えよ！」の叫びが発せられる。

ところが、大学生にもなれば、大学教育が自分の殻を破るのに役に立たなければ自分で工夫してなんとか殻を破る者が出る。「生かさず殺さず」の状況を客観的に見てとることができれば、大学時代を自分流で生き抜く。活躍の場がなければ、そういう場を既存のサークル活動に求めるか、それがダメなら自分達で活躍の場を創造してしまえばいい。

この大学生の、大学教育が頼りにならないがゆえのサバイバルの意味するところは、大学教育“無視”である。「なまじ大学教育になど期待すると、酷い目に合うぞ！」という大学生が先輩から受け継ぎ、自らもキャンパスの雰囲気から漠然とその確かさに納得した結果としての大学教育無視の態度。大学生には卒業・就職というホンネの部分で譲歩しなければならない事情があるから、むしろ大学教育を完全無視するケースは少ない。タテマエとしての大学教育を成り立たせる最低の努力は怠らないし、大学教育を重視するケースが少ないというのでもないが、日本の大学生の自学自習の平均が1時間前後という数字にそのシッポが見えている<sup>1)</sup>。

「大学生は自由な者として大学に入学した、しかも至る所で鎖につながれている。自分が学生の主人であると思っただけに見える教授たちも、実は学生以上に奴隷なのだ。どうしてこの変化が生じたか？ 私は知らない。何がそれを正当なものとしうるか？ 私は、この問題は解きうると信じる。」<sup>2)</sup>

「大学という語の真の意味は大学生の間では、ほとんど全く見失われてしまっている。大学生の大部分は大学をキャンパスと、またキャンパスに行き交う若者を大学生と取り違えている。彼らは校舎がキャンパスをつくるが、大学生が大学をつくることを知らない。」<sup>3)</sup>

以上は、高校の教科書にも紹介されている、J・J・ルソーの『社会契約論』の有名な部分を大学に当てはめて、私がモジったものである。このようなモジリが大学（教育）論で必要となるのは、大学生の〈大学（教育）論＝面白くないもの〉という図式を崩すためである。この図式には〈大学＝論ずるに足らないもの〉という大学観が前提されている。この前提にショックを与えなければ、大学生サイドでは、そもそも大学（教育）論というものが成り立たない。

そこで、「大学生は自由な者として大学に入学した、しかも至る所で鎖につながれている」のようにルソーをモジって〈大学生＝奴隷〉論に仕立て直して“明るく”提示する。これは大学生にとって衝撃的である。この衝撃は爽やかな共感を大学生に呼び起こす。だが、それから以後が問題で手も足もでない。私自身、大学論を執筆するために大学2年の頃、必死にルソーを研究した<sup>4)</sup>けれども、ルソーに関心をもって知ったのは、次のような日本の大学の学問的事情であって、この事情を大学生の身で突破することは、能力的にも、立場的にもできる話ではなかった。

すなわち、今日、日本の大学問題を解決するカギが、もしルソーにあるとすれば、たとえ大学生

であっても、「そういう問題は、全部、教育学部の人にお任せ！」というわけにはいかないということ。なぜなら、「大学での学問が何になる？」というのであれば『学問芸術論』が、「大学間序列の狭間で苦しんでいる」というのであれば『人間不平等起源論』が、「日本の大学生は、なぜ精神的に自立できないのか」というのであれば、すでに示したように『社会契約論』が“参考になる”という意味で読まれるべきであろう。ところが教育学部でルソーと言え、大学生レベルでは『エミール』の著者であるにとどまってしまう。ルソー研究自体が、丸山氏の表現を使えば「タコツボ」化していて、法学部のルソー、人文学部のルソー、教育学部のルソーは、これが同じルソーなのかと思えるほど個別的に研究されて、ルソーの全体像から〈大学生＝奴隷〉論を提出して議論を惹起することなど望むべくもなかったのである。

そのような中で丸山真男氏は、私の印象からは「当時の大学生で『日本の思想』を読まなかった人はいたのだろうか」と思えるほど広範な読者層をもち、大学生が大学（教育）論を展開する際には議論を進行させるうえで貴重な存在だったはずである。残念ながら、この場合には一応、読みはしたものの、丸山氏の著作に私自身が心に響くズシンとしたものを感じなかった。いま頃になって読み返して「そうであったか！」と“下衆の後知恵”をやっている始末である。だが丸山氏ではなく、ルソーに、私の関心が行ってしまったのも故ないことではなかった。パスカルは「書物を読んで1人の人間を見いだそうと思っている人は、1人の作者を見いだして非常に驚く」（松浪信三郎、訳）と書いたが、その逆もあり、いま私が丸山氏の著作を読み返しているのは、丸山氏ではなく、ルソーの存在が人類の歴史からくっきりと浮かび上がってくるという、その効用によってなのである。

言うまでもないが、丸山氏の『日本の思想』を読みながら人類の歴史からルソーが立体的に浮かび上がるのを観るに際して、同時に私が観ているのは、その周囲に展開している光景であり、それは日本のものである。その日本を適確に描くばかりでなく、見事に透視してしまう丸山氏の冴えには、ただ脱帽するばかりである。脱帽はするものの、読者である私にとっての問題は、丸山氏が日本の社会・文化の型をヨーロッパの「ササラ型」に対して「タコツボ型」とした背景に大きくルソーが関わっているように思えるが、〈大学生＝奴隷〉論の原型としてのルソーと日本の大学（教育）との関わりは、いったい、どうなっているのだろうか、ということである。

「ギリシャ——中世——ルネッサンスと長い共通の文化的伝統が根にあって末端がたくさんに分化している。……それが共通の根をきりすてて、ササラの上の端の方の個別化された形態が日本に移植され、それが大学などの学部や科の分類となった。……明治の国家体制にはそうした学問形態の方が都合がよかった……こういうふうにして、初めから非常に個別化された、専門化された形態で近代の学問が入ってきたために、学者というものはそういう意味での専門家である、個別化された学問の研究者であるということが、少くも学界では当然の前提になった。……学問研究者が相互に共通のカルチュアやインテリジェンスでもって結ばれていない。おのおのの科学をほり下げて行くと共通の根にぶつからないで、各学科がみんなタコツボになっている。」<sup>5)</sup>

以上の丸山真男氏の論述から、直接的にルソーに結びつけるのは難しい。しかし『日本の思想』で同氏が提出した「タコツボ型」「ササラ型」という社会・文化の類型は、これもまたあまりに有名

であるが、「『である』論理」「『する』論理」という2つの思想的類型によって裏打ちされている。「タコツボ型」から「ササラ型」への移行を期待するならば、それは「『である』論理」から「『する』論理」への移行を意味するとも理解できる。「『である』論理」から「『する』論理」となれば、大学生当時の私の限られた視野からすれば、先程の〈大学生＝奴隷〉論の原型であるルソーの世界そのものであった。

さて、この「『である』論理」「『する』論理」を使って教授の側の事情を論じるのは丸山先生にお任せするとして、私の得意とする大学生の側を論じるならば、「大学生である」から「勉強する」という論理的な流れは、日本の大学生の実態に馴染まないばかりか不自然でさえある。大学生の言葉で表現すれば、「それは大学生の行動として“滑稽”なのである。むしろ「大学生である」から「遊んでいる」という方が論理としての流れがいい。日本語の「大学生」という言葉は、その属性として「遊ぶ」というイメージが想定されて使われるケースが多いのである。

現実には日本の大学生は勉強しないのでも、したくないのでもない。「大学生である」から「勉強する」という大学生本来の姿を回復するためには、その順序として、まず「大学生？ じゃあ遊んでいるんだろう」という社会の固定観念を払拭する必要があるが、その作業ができずにいるのである。最近の大学教育改革の動向を見ていると、「大学生を勉強させよう」が無理と知って、大学生を消費者に祭り上げて「大学生に勉強していただく」の方向に向かっているようである。果たして「勉強させる」から「勉強していただく」への移行によって、〈大学生＝遊ぶ〉という図式を崩せるのであろうか？

教授サイドからすれば、崩さなければならないものは崩すしかないであろう。だが、〈大学生＝遊ぶ〉という図式を崩すのは具体的には個々の大学生なのであって、大学生の側にこの図式に対する不快感と、それを自覚的に崩そうという意識がなければ、教授サイドからの一方的な「勉強していただく」の善意は反転して、先程、ルソーの『社会契約論』を大学に当てはめて見えてきた〈大学生＝奴隷〉の図式を一層強固に補強することになる。学ぶ側への「勉強していただく」の姿勢を消費者サービスとしてではなく、教授する側の学ぶ側への“媚び”であると理解するとき、教授する側も〈教授＝奴隷〉の図式に取り込まれ、その中に自ら沈んで行くのを阻止することはできなくなるだろう。

大学生「である」ことは、そのままでは意味がない。意味がないから「一流大生」であることに意味を求める結果になる。こうして受験競争は、“おいしい”とされる限られた量のパイ（入学者定員）の争奪という形で加熱することとなる。しかし、「大学生『である』」だけでは意味がないから、「『一流大生』である」ことによって意味を出そう、という受験の現状は、丸山氏の表現で言えば、「『である』論理」から「『である』論理」へのフラットな移行にとどまり、どんなに待っても「『である』論理」から「『する』論理」へとディメンションを変えることはない。

日本の受験競争の最大の問題点は、大学入試によってすべてが決着させられてしまうところにある、とされる。優れた大学教育によって大学入試の結果をこそ、無意味化する。つまり、受験が競争なら“敗者復活”が大学レベルでも可能であれば、大学生ばかりでなく、受験生もまた大学入試に振り回され、その結果をくよくよ悩まずに済む。その、いま大学教育に緊急に求められているは

ずの肝腎な大学教育の理想形態が、教授サイドからは採れない。この大学教育の、と言うより日本の教育全体の不幸をなんとかするとすれば、「大学生『である』」と「勉強『する』」との間に決定的な断絶を見る必要があった。しかも、その断絶をまじまじと見詰め、その意味および打開策を考えるのは教授サイドではなく、まずは個々の大学生でなければならなかったのである。

ここまで論じたところで、先程の『社会契約論』のモジリを改めてご検討いただければその真の意味が明らかになるだろう。「彼ら(大学生)は校舎がキャンパスをつくるが、大学生が大学をつくることを知らない」との認識は日本の教育が脱却すべき主題を、〈教授=奴隷〉という図式を従えながら〈大学生=奴隷〉という図式によってセンセーショナルな形で日本の全大学生に突きつけるものだったのである。言うまでもなく、ここでは大学生が主役となっており、大学改善から大学革命への飛翔が期待されている。

だが大学改善をするにしろ大学革命をするにしろ、この種の過去の成果からするなら、私達の期待は、いままで裏切られ続けすぎている。明治時代に『社会契約論』を日本に翻訳・紹介した中江兆民は、怒りと嘆息を交えて「吾人が斯く云えば、世の通人的政治家は必ず得々として言わん、其れは15年以前の陳腐なる民権論なりと、欧米諸国には盛んに帝国主義の行はれつつある今日、猶ほ民権論を担ぎ出すとは、世界の風潮に通ぜざる、流行遅れの理論なりと。……僅に理論として民間より萌出せしも、藩閥元老と、利己的政党家とに揉み潰されて、理論のままに消え滅せし故に、言辞としては極めて陳腐なるも、実行としては新鮮なり、夫れ其実行として新鮮なるものが、理論として陳腐なるは果たして誰の罪なる乎。」<sup>6)</sup>と書いた。

丸山真男氏は、この兆民の怒りと嘆息を見おろす位置から『日本の思想』という名著を書き上げた。出版されてすでに35年が経過しているから、同書をもって教授サイドを代表させることには問題があるだろう。それは承知しつつも、それでも敢えていま、大学生に向けて「それでは、教授サイドの『日本の思想』と対になるべき大学生の著作は四半世紀前の大学闘争を含め、果たして今日までに1冊でも生み出されているか？」と問うべきではあろう。〈大学生=奴隷〉論のような、大学生にとっても議論の出発点になりえて、しかも「そこから緊急に脱出することが自分達の課題なのだ!」と、誰よりも大学生自身に納得できるような形での「である」論理の弊害問題が教育界に提示されたことは、未だかつてなかったのである。もし提示されていたとしたら、中江兆民のような怒りと嘆息を最後に、空しく忘れ去られたのである。

## 2. プロセスとしての〈受験体制=幕藩体制〉論

ほとんどの大学生は学者になるために大学に入学したのでもなければ、大学で勉強しているのでもない。このことは、「学歴は有用か」「学歴社会か学校歴社会か」といったテーマでの学問と、大学生が大学に期待している学問との間には決定的なズレがあるということを意味している。現実の中で生き生きと学び、その学ぶプロセスで自分の殻から出ることができたなら、自分自身の成長が実感できたなら——、それが多くの大学生の大学教育への期待というものである。

むろん、今日の大学でも「忙しく学ぶ」ことはできる。「社会に出てすぐに役に立つ勉強」もでき

る。「学者になるための基礎的研究」にしてもできないことはない。それなら「日本の大学も満更でもないではないか」という話になるが、タコツボ化した日本の大学の学問の在り方からは逃れられない。逃れられないから学部・学科の新設・増設によってその弊害を除去しようとしたのが、従来の大学経営のスタイルであった。

だが、そうしたビルド・アンド・ビルドによって弊害を横へ押しやることはできても、依然、弊害は弊害として残り、その被害を受けるのは“何も知らない”大学生である。最近の、学際性を強調することによって教養部を解体・改組する流行にしても、そのことによってタコツボ型の大学の在り方が改善される保証はどこにもない。それでも、歴史的使命を終えた（私個人は「未だ始まっていない教養部」という立場を採る）学部・学科が解体され、新たに時代の要請を受けて再構築されるのであれば、その再構築の際にタコツボ型から脱却するチャンスは生まれる。どうか、そのチャンスを生かしていただきたい。

しかし本格的な時代の転換期を迎え、一刻も早く、いま入っているタコツボから出てササラ型へ移行しなければ、その身が危ないのは、いま給料がもらえている教授サイドではなくて、実は“タコツボから出ることの意味を知らない”大学生の側だったのである。前章において、出発点としての〈大学生＝奴隷〉の図式が提示された以上、大学生の側は、同じく〈教授＝奴隷〉という図式を手にした教授サイドに対して優越的に並んでいる。むしろ、高度・細分化された学問で並ぶのではない。タコツボの中に安穩としていたい者が多数派の教授サイドと、緊急にタコツボから出てササラ型に移行しなければならない切羽詰まった事情を抱える大学生サイドとでは、どちらが速やかに状況を突破できるか、ということである。

「中津は封建制度でチャント物を箱の中に詰めたように秩序が立っていて、何百年経っても一寸とも動かぬという有様、家老の家に生まれた者は家老になり、足軽の家に生まれた者は足軽になり、先祖代々、家老は家老、足軽は足軽、その間に挟まっている者も同様、何年経っても一寸も変化というものが無い。……封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察して独り泣くことがあります。私のために門閥制度は親の敵で御座る。」<sup>7)</sup>

2年程前、ある大学1年生は大学に入って数か月経っての感想を一言で「生かさず殺さず！」と喝破した。日本の歴史を振り返り「生かさず殺さず」となれば、言うまでもなく江戸時代の身分制度である「士農工商」の“農”の位置である。こうしてみると、上に引用した福沢諭吉の批判する封建制度が時空を超えて、いま〈受験体制＝幕藩体制〉という形で教育制度に“再構築”されているのではないか、という疑いが兆す。通俗的な言い方だが、いわゆる東大を頂点とするピラミッド型の大学間格差は封建社会として存続していて、だからこそ、大学がムラのかつタコツボ的な様相を呈するのではないか？

表現によっては統計学その他の学問的問題が出るにしても、このピラミッドを形成するに際して“受験偏差値”が利用されているのは否定できない事実である。とすれば、大学生の授業料を“年貢”とし各大学を“藩”として受験偏差値を“石高”とする〈受験体制＝幕藩体制〉論を展開して、現代日本の幕藩体制を描写するのは、それほど難しい作業ではない<sup>8)</sup>。要するに、フランス革命以前のアンシャン・レジームを日本の江戸時代の封建社会に位置移動させるとともに内容も日本的なも



のに変容させ、さらに時代を現代にずらした平成版〈受験体制＝幕藩体制〉論が描けるのである。この段階に至れば、大学革命の具体的な“シナリオ”をみんなで議論しながら考え、提出するのは難しいと言うより、楽しい作業となってくる。

どうやら、この「楽しい作業」への教授サイドとの対等の参加、つまり大学革命への参画こそが、少なくともいま大学生が期待している学問だったようである。この大学革命に大学生が参画するとなれば、その勉強はササラ型にならざるをえない。ルソーを読めば、ルソーの生涯を通じての愛読書であったアミョ訳の『プルターク英雄伝』に行ってしまう。このアミョのフランス語訳からモンテーニュの『エッセー』が生まれ、この『エッセー』からデカルトへ、パスカルへと時代を下だり、ここで海を渡ると、イギリスにはホッブスやヒュームが控えている。もう一度海を渡ると、トマス・ペインの『コモン・センス』が待っていてアメリカ独立戦争、かくしてフランス革命に至る。

日本関係であれば、日本思想史という学問に出会うであろうし、日本社会のタコツボを覗くとなれば、ルース・ベネディクト、土居健郎、中根千枝といった学者の著作が視野に入ってくるだろう。いずれにしても、世界の名著を古今東西南北、楽しく読んで読んで、読みまくることができるのである。好都合にも、タコツボ型の学者世界は読書範囲が狭いから、タコツボの外、つまり専門外となれば、その知識の質において、量においてさえ、いつも大学生が大学教授にひけを取るとはかぎらない。そして不思議なことに、この楽しい読書に要する時間は、本を厳選すれば（ここにこそ、大学単位の“一般教育のエクセランス”をめぐる評価問題が健全に登場する！）、1年もあれば十分なのである。

こうして大学生の側のササラ型への移行はめでたく完了するのであるが、教授サイドはこう簡単にはいかない。それもそのはずで、日本の大学教育がうまく行かないのは、教授サイドと大学生サイドとで単位の授受をめぐる“タヌキとキツネ”の化かし合いが繰り返されている。ほんとうは対立しつつも、対立しては困ったことになる教授サイドと大学生サイド——これが日本の大学教育の悲喜劇的な側面なのであり、その関係は師弟関係というより、ケンカになれば子が負ける“親子関係”に近い。生活の場ならばそれでもいいが、大学のような教育機関での親子関係は組織そのものを“子ども世界”にしてしまう。親から「名著だから読んでごらんさい」と勧められて“素直に”それを読む子どもはいない。

教授サイドからの一方的な大学教育の改善には自ずと限界があるのである。この限界を超えるには、大学生サイドに〈大学生＝奴隷〉の図式を、教授サイドに〈教授＝奴隷〉の図式を平等に配する足場を“大学の外”に築く以外に方法がない。その足場こそが、私達の「インターカレッジ 私塾“竜仙庵”」なのである。むろんのこと、突然、そんな平成版“私塾”などを創っても、受験塾が何かと間違われるのがオチである。従って、私達の私塾“竜仙庵”も〈受験体制＝幕藩体制〉論を基礎として“幕末”を演出しつつ、同志がそれぞれに“討幕”に向けて燃えることができるようなシナリオを、いつの間にか描いてしまっている<sup>9)</sup>。

ある日、江戸時代の封建社会そのままの大学ムラに、お家の存亡にかかわる一大事が伝えられた。平成4年をピークに18歳人口が急減期に入る。「18歳人口の急減」という黒船がやってきたのである。なんでも「大学ムラを開放せよ！」（開国）と要求しているらしい。詳しく聞いてみると、

それどころではない。徳川家（文部省）は、幕藩体制の基礎だった大学設置基準を自由化してしまつたらしい（大政奉還）。「ええ！」と驚いている間に、平成維新とかで、今度は「国際化せよ、個性化せよ！」の大合唱。遠國小藩の大学ムラの多くは、訳が分からないまま、「仕方がない。おらがムラでも、その国際化・個性化とやらをやってみよう！」という話になったとか。もっとも、これはムラのお偉いさんたちの話で、目安箱を設置（学生による授業評価）して足軽たちの意見を聞いてみれば、「ええ、オレたちは昨日まで関ヶ原（大学入試）だったんだよ。少しは遊ばせてくれよー！」というわけで、お偉いさんたちの平成維新にはソッポを向き、「専門教育重視」の美名のもと〈大学生＝奴隷〉の凶式が強化されて首を絞められつつも、「それ、遊べや遊べ。世は元禄じゃ！」（大学レジャーランド論）とばかりに昼夜をおかずお祭りをして遊んだとか。いつの時代でも若者は元気なものじゃ。

戯画化がすぎたかもしれないが、討幕で活躍したのは遠国雄藩と小藩とであった。それがズッコケる。大学生が坂本龍馬となって脱藩しても〈受験体制＝幕藩体制〉論がなければ、そもそも脱藩すべき大義がないから行くところもなければ、することもない。吉田松陰にしても密航を企てる必要がなく、大手を振って“留学”できてしまう。これでは討幕するもしないも、討幕そのものが成り立たない。〈受験体制＝幕藩体制〉論を基礎に据えての話なら、いくらでも大学革命を討幕論という形を採って冷静に論じることができるだろう。それが制度的にタコツボ型で始まった日本の大学を“ポロ隠し”的に、しかも“国際化・個性化”という維新論のコンセプトを使って再編成かつ改善しようというのが、現行の大学教育改善なのである。維新論のコンセプトを使うなら使うで、その場合には“エリート主導”による富国強兵政策、つい先頃までなら「追いつけ追い越せ！」のスローガンが必要となるはずだが、はて？

再び教養部の解体・改組を例にとるならば、タコツボ化を押し進めるだけのビルド・アンド・ビルドよりはましであるにしても、スクラップ・アンド・ビルドが日本の場合、本来的に大学生のタコツボ化を防ぎつつ、その勉強をササラ型へ移行させなければ、そもそも大学教育などというものが成立しない、という事情を具体論に立って打開する観点が弱すぎる。複数教員による総合科目にしても、表面的にササラ型に見えるが、その実際は、大学生サイドからすれば、タコツボの羅列にすぎないケースがあまりに多い。

すでに見たように、ヨーロッパ思想史をヨーロッパ思想史として教えるのでは、大学生の側がタコツボ的勉強を強いられる結果となり、ササラ型の勉強はできない。〈大学生＝奴隷〉論のようなもの（もちろん、これがすべてであっては困るが）を中心に据えて、タコツボ間を自在に行き来できる条件が“シラバスに”ではなく、各授業を超えてカリキュラム全体に大学教育を統合する“シナリオとして”明瞭に大学生に提示されている必要があったのである。「大学生である」から「勉強する」が、現実からする日本の社会的常識から大きくズレを来している以上、その打開策の1つを、教授サイドの切り札と思われる総合科目に求めること自体は正しいだろう。しかしその試みをもつてしてもなお、十分な成果が得られないのはなぜか？という、より大きな問題が、いま問題なのである。

ここで「脱藩」の観点が必要になってくる。説明が長くなるが、現状でも海外の大学との姉妹校

提携、国内外の大学との単位の互換を中心とする“インターカレッジ”の方向は指向されてはいる。だがそれは、入学後にも大学生が所属大学を換える、ドイツのような選択の自由がないのを前提としている<sup>10)</sup>。大学生を羊とした“エンクロージャー”である。そのエンクロージャーをしている大学側が「羊の自由に任せ、牧場の間を行き来できるように、ちょっと柵を開いてみました」と言い張って、“エンクロージャー”という事実を否定できるものではない。日本の大学開放と、根本的な大学開放との間の隔たりは想像を遙かに越えて大きいのである。

たとえば、アメリカにおいて学生消費者の動向を睨んで消費者サービスの観点から大学教育が論じられうるのは、「ウチの牧草はおいしいよ！」を歌い文句に、大学生という名の羊を集められる条件としての“トランスファーの自由”が羊（大学生）の側に認められているからである。アメリカの場合、羊ではなくて牛かもしれないが、その羊または牛の側が、無体な飼い主の意向に屈従しなくてもいいように牧場を換えてしまう“見限りの権利”をもっているのである。大学と大学生、どちらが飼い主か分らなくなる自由である。

それに対して日本の大学は牧場ではなくて、受験偏差値による、たった1つのピラミッド型の封建的幕藩体制のもと、封建的“藩”としての大学が国際化というお祭りなどしながら細々と生き長らえ、武士（教授）は農民の年貢で悲喜こもごもの生活をし、大学生という名の農民の子は、年貢は親に出させて、放蕩三昧。みんなで「世も末じゃのお！」などと呑気なことを言っていたのは、つい昨日のことであった。そこに、突然の18歳人口の急減という黒船の来航。となれば、歴史の流れからして「討幕だ！」と誰かれともなく騒ぎ出すはずなのに、どこを探しても坂本龍馬の出番がない。すでに説明したように、日本の大学世界は討幕を“節約して”維新に行ってしまう、またしても“タコソボ”問題に悩むべくして悩んでいるのである。

教授サイドがこれなら、大学生サイドは、大学入試に合格して入学手続きをした段階で「〇〇大生『である』」という帰属意識によって事実上“囲い込まれてしまう”。「私が私である」とは、「〇〇大生『である』私」ということなのである。この時に大学生個人に対する受験偏差値の介入を許してしまっている。「である」論理は、同時に「である」価値でもあるからである。従って、いま「である」論理・「である」価値の世界に住んで居心地がいいのは、大学生の場合、特権的な「一流大学一流学部一流学科一流ゼミ生」だけ、ということになる。

なんともはや人気のなさそうな特権だし、奇妙な光景だけれども、これが私塾から見える日本の〈受験体制＝幕藩体制〉というものなのである。私塾からならば、この、誰もがその崩壊を望んでいる幕藩体制が、遠くから距離をとって客観的に見える。この光景さえ見えれば、自分なりに手立てを考えて楽しみながら“討幕「する」”ことによって「である」論理・「である」価値を、「する」論理・「する」価値へと転換できる。そこに登場するのは、中江兆民を怒らせ嘆息させた「する」「しない」の問題であって、本気になれば〈受験体制＝幕藩体制〉を崩壊させる程度のことは、そんなに難しい作業ではない。恐らく、いま大学生に求められ、教授サイドにも求められているのは、こうしたことを可能にする現代の私塾からの視点である。そして、この視点を確保するには、封建的な藩としての自分の大学を相対化すべく大学生サイドも教授サイドも“精神的に脱藩（インターカレッジの視点確保）”できればよかった。まさに、コロンブスの卵である。

再度、繰り返せば、大学生個人が「である」論理・「である」価値から「する」論理・「する」価値への転換ができないとは、ルソーのモジリから出てきた「大学生は大学をつくることを知らない」の“知らない”の部分に屈伏したのであり、その大学生活はアンシャン・レジームたる〈受験体制＝幕藩体制〉に“寄生する”ものにしかならない。当然のこと、大学生が〈受験体制＝幕藩体制〉に寄生してしか生き方を“知らない”というのであれば、教授サイドにも同じく受験体制＝幕藩体制に寄生する権利が“既得権”という形で確保されてしまう。イエーリングが『権利のための闘争』（村上淳一、訳）でカントを引用したように、「みずから虫けらになる者は、あとで踏みつけられても文句は言えない」のである。こうなってしまうと、大学生の迷惑を顧みず「大人の論理」の展開として授業は行なわれるが、その内容は墮落している危険なしとしない。ほんとうは、こういう場面に至って初めて“学生による授業評価”に意味が出てくるのである<sup>11)</sup>。

### 3. 大学教育のパラダイム変換

この辺りで、私達の「インターカレッジ 私塾“竜仙庵”」の風景も描いておく必要があるだろう。“宴会学派”の異名をとるくらいであるから宴会を中心に学問論、芸術論などを展開している。プラトンの“シンポジウム”を地で行っているのであるが、さすがに仕掛けがないと生産的な集まりにはならない。みんなで講師に立って読書会をする。論文発表会を開く。著者を招いて意見交換をする。音楽家も同志にいるから、その演奏会に出掛ける、等している。しかし、なんと言っても、同志それぞれの世界を発信・受信するための生原稿ライブラリー“竜仙庵文庫”が、私塾“竜仙庵”の基礎である。

職業柄、いろいろな大学にお邪魔するが、ひっそりとした部屋に「卒業論文」が死蔵されているのをよく見掛ける。あれが原型で、あの卒業論文の著者が卒業してしまわずに互いに論文を読み合ったら、どうなるか。その卒業論文集を「著作集」として、さらには活字にならない原稿などをジャンルの区別なく同志の作品として納め配架した場合、どういうことになるか。さらに年齢・職業の別なく、同志各人が1冊の「著作集」をもつと、どういうことが起こるか。読まれるはずもない卒業論文が同志の間でベスト・セラー並みに読まれるのである。そうなると、互いの世界を論文・作品によって知っているわけであるから、共通の言葉が生まれてくる。「各組織体がみんなタコツボ化しますと、……その相互の間に共通の言葉、共通の判断基準というものが自主的に、つまり下から形成されるチャンスはおのずから甚だ乏しくなる」<sup>12)</sup>。こう丸山真男氏が論じたタコツボ化の弊害は生原稿ライブラリー“竜仙庵文庫”によって克服されるのである。

「われわれの社会における言語が組織の多元化と並行して複数的になるということ、それからイメージ自身が、それがどんなに元来の対象から離れていても、そのイメージなりに社会的に通用して、独自の力になっていくという、この基本的な事実から出発して全体状況についての鳥瞰をいわばモニタージュ式に合成していくような、そういうテクニックと思考法というものを、われわれが要求されているんじゃないか……

……つまりこれがほんとうの『真理』なんだ、あとはみんなイリュージョンなんだといって安

閑としていると、『イリュージョン』がどんどん新たな現実を作っていく、『真理』の方を置いてきぼりにして、現実が進行してしまう……むしろどういふふうに、人々のイメージを合成していくか、組織内のコトバの沈澱を打破して自主的なコミュニケーションの幅をひろげていくかというのが、これからの社会科学の当面する問題ではないでしょうか。」<sup>13)</sup>

丸山氏は『日本の思想』で引用部分だけではなく、「である」論理から「する論理」へ移行するための“テクニックと思考法”の研究、開発の必要を説いている。私が学生時代に読み落としたと言うより、読もうにも読めなかったのは、この提案部分であった。10年程前、広島大学大学教育研究センターの関正夫先生から“一般教育学会”にお誘いを受けて以来、人文科学、社会科学、自然科学の3科学の統合に頭を悩ませ続けたが、この丸山氏の「基本的な事実から出発して全体状況についての鳥瞰をいわばモンタージュ式に合成していく」という“テクニックと思考法”の研究開発によって、確かに人文科学、社会科学、自然科学の3科学の統合が“受験から自由な”大学教育レベルでならばできたのである。

私が研究しているのは“学生問題”を下から上へ試行錯誤しながら“総合”することによって“成長のプロセス”を確保しようというものである。この「学生問題」を「市民問題」に置き換えれば、「生涯学習」の研究にもなるし、「政治研究」「経済研究」にもなる。さらには“成長のプロセス確保”の研究から「音楽の研究」に、“試行錯誤しながら総合”の部分から「自然科学の研究」にも関心を広げてしまう。この学問分野を「学びつつ生きて、さらに学ぶ」という意味で“Studentology (学生学)”と称したこともあった。それはそれとして、この学生学の研究は既存のすべての学問分野が参考になるという意味で、参考にするべき学としての纏まりのある先行研究をもたなかった。

判断材料としてのデータがなければ、およそ学問というものはできない。それと私の場合、大学教育研究を大学2年の時から開始しなければならなかった、という事情を個人的に抱えていたために膨大な量の“大学生の文章”を20年以上にわたって熟読することになった。大学生の文章には“出典”があるケースが多い。膨大な量の大学生の文章が典型的に“分類”できることから、その出典が割り出せたものは、その出典部分を空欄として筆者が何を言いたいのかだけを検討する。こんなことを繰り返したが、結局、分析するだけの価値があるのは、抽象的な言葉が少なく具体的で素朴な主張であった。

その素朴な主張を、数十、数百、数千と読み続けると、その膨大な大学生の主張の山の中からエッセンスが分析、抽出できる。その際にはエミール・シュタイガーなどの解釈学<sup>14)</sup>の手法が参考になったが、このエッセンスで大学(教育)論を著作すると<sup>15)</sup>、奇妙な説得力が生まれた。エッセンスで書かれているわけであるから、大学生サイドも教授サイドも、ぐうの音も出ない。言われてみれば、確かにそうなのである。しかし、ぐうの音も出ない事情は筆者の側も同じことで、エッセンスを抽出しはしたものの、その内容に関して筆者である私にその文責を問われてもエッセンスはエッセンスであって(自然科学でなら、方程式のような数学の言葉で表現されるところ)、私が自分の考えで恣意的に書いているわけではない。結局、この問題はプラトン以前、ヘラクレイトスにまで遡ることによって初めて説き明かすことができると知ったが、残念ながら、ここでは詳しく論じている暇がない<sup>16)</sup>。

私が丸山氏の「基本的な事実から出発して全体状況についての鳥瞰をいわばモンタージュ式に合成していくような、そういうテクニックと思考法」という表現に強い共感を抱くについては、こういう経緯があったのである。しかし「テクニックと思考法」ということになると、さらに強い共感を抱かずにはいられなかった。実は、私は数年前から武蔵大学の林義樹教授と共同研究を続けており、その林教授から川喜田二郎氏のKJ法ほか、林教授が開発しておられる“ラベル思考”の実際を教えていただいた<sup>17)</sup>。基本的な事実から出発して全体状況についての鳥瞰をうるという話になると、私は、このKJ法を思い出す。

KJ法についてもここでは紹介する暇がないが、この方法は場面を選びさえすれば、極めて優れたものである。ただ文章家のせい、私には30字から50字程度の文章を組み合わせるラベル思考は欲求不満に陥って馴染めなかった。さらに「人類の視野と思考パターンを知るために、まずは“古典を大量に流し読んで”から面白いところを熟読。それから研究へ」という人文科学的伝統を捨て切れずにいる私としては、ラベル思考よりも読書会の方が性に合って知的刺激に満ちているように思われたのだが、ここで、またしても“宴会学派”の本領を発揮、宴会のノリから林教授の“ラベル思考”を参考に「Spiral Message Board 討幕伝言板——内なる開国、素晴らしい出逢いのための——」なるものを、みんなで始めるが早いか開発してしまった。

KJ法の「30字から50字」を「ハガキ大、500字前後」にして纏まりのある主張として、3枚（三人寄れば文珠の知恵）をセットにして1枚の「討幕伝言板」をつくったのである。1年間でNo.108まで出したから、書かれた文章総数は300ほどである。500字程度の文章を脈絡もなく、筆者の関心もバラバラで、そんなに集めてどうするのか？しかし討幕のコンセプトがあれば、脈絡は自然とできる。そのイメージは、受験偏差値信仰が黒雲のごとくたれこめたキャンパスから、みんなで急上昇して黒雲の上へ抜けてしまう“竜巻”である。古今東西南北の文化遺産を巻き込みながら、1年間のスパンで受験偏差値から自由になったことを自ら証明、納得して自信がもてるようになったとき、みんなの“ペーパー・サロン”（当時、多摩大3年だった小島幸博氏の表現）は、その歴史的使命を終えるのである。

「たったそれだけのこと？」と思われるかもしれない。そうである。大学生が「我等に活躍の場を与えよ！」と叫ぶとき、教授サイドの答えは「じゃあ、授業で頑張って勉強してネ！」であった。「そんなもん、言われずともしてるよ！」が大学生サイドの反論だった。「こんな大学、あんな授業でAを並べてなんになる！」という大学生の怒りの声も聞こえたはずである。新聞の投書欄を読んでいると、毎年3月ごろから、大学生読者の、こうした大学教育批判が始まり、7月ぐらまでは続く。その500字前後の大学批判に、教授サイドからの弁明、反論が載る。しかし新聞紙面は公平を旨とするから、1人1度の独白が許されるだけ、どんなに反論したくても1回だけ、あとはボツになる運命にある。

このボツになる運命にある500字原稿を「討幕伝言板」で全部生かして論争を展開すると、どうなるか？大学生にも“論陣”というものが張れる、ということが分かる。最初は論陣が張れずとも1年間のスパンがあれば、文章の練習もできて、頭も練れてくるから、その人らしい論陣が張れるようになる。論争をすれば、自分の発表した意見なり考えなりが、他の人達の文章によって“相対

化”されて自分にも見えてくるから、自分の位置というものも見えてくる。さらに、文章というのは論理手段であると同時に、芸術の手段でもあるから、教授サイドが常に優れているとはかぎらない。従って、「そんなに文章が書きたかったら、同人誌でもつくったら？」との教授サイドの反応。これなど新しい工夫・考案の前では、一種の逃げとなってくるのである。

こうして1年間の討幕伝言板が終了したとき、竜巻のように立ち昇った原稿から「捻れの位置」（小島幸博氏の表現）に自分の文章が配されているのを見る。それを抜き取り編集すれば、1冊の著作となる<sup>18)</sup>。討幕伝言板はプライベートなものであるから、そのままでは出版できそうにもない（閲覧、可）。しかし、そのイメージを紹介するためかと思えるくらいに絶妙のタイミングで、山下邦彦編著『坂本竜一・音楽史』（大田出版 1993）が出版された。日本の『アメリカン・マインドの終焉』（アラン・ブルーム著）とも言うべき本で、「一般教育の教科書」としては最良のもの1つであろう（編著者の山下氏に来庵いただいてお話を伺い、ようやく一般教育との関係の問題が解けた）。

それはともかく、この本は伝言板の体裁こそ採っていないが、結果的に、討幕伝言板に大学生が書いた500字の原稿の位置に、坂本竜一、蓮實重彦、浅田彰、中上健次……といった著名人の文章や発言がズラズラ出てくる。コンピュータ、数学も論じられれば、ウィトゲンシュタインの哲学、マックス・ウェーバーも論じられている。音楽から入りたい人は音楽、文学から入りたい人は文学、数学から入りたい人は数学から入れる、そんな入口をたくさんもった竜巻状の壮大な世界を、山下邦彦という編著者が“超・編集者の位置”から築いたのである。大学生の側からすれば、このような著名人ばかりの世界の中に自分の文章が収録されていないのは当然すぎるほど当然に思えるであろうし、教授サイドからは「坂本竜一は、よく分からない」ということになるのだろう。

しかし、自分の文章なり作品なりを発信するユニヴァーサルで、かつインターカレッジとなっている世界がキャンパスにないのならば、その“理想の世界”を自分達で創造「する」（場の創造）ことによって、興味・関心を同じくする人々と、さらには年齢・性別・国境を越えた人々と、こっちから率先して出会ってしまう以外にない。この行動力が発揮できなくては「する」論理への移行ができないし、それよりなにより受験偏差値の呪縛から自由になれない。教授サイドであれば、いまは別の人かもしれないが、いずれにしても坂本竜一のような、若者にとっての“時代のキー・パーソン”を抜きにして大学生と互いに理解し合うことなどできない。では、具体的にはどうするのか？ その問いに対する私塾“竜仙庵”の答えが、「討幕伝言板」なのである。

3枚を1セットとする竜巻のイメージをもつ“討幕伝言板”の考案。実は、ここでも丸山真男氏の『日本の思想』とダブルものが私の側にはあった。同書の「II 近代日本の思想と文学」において、丸山氏は「政治対文学の二元的対立関係を、『科学』もしくは『理論的なもの』に対する文学の側での捉え方という問題を投入することによって、三角関係として再構成してみよう<sup>19)</sup>と試みている。W. S. ベックを引用して「自然科学においてさえ、『創造の過程は個人のエモーショナルな規制と緊密に結びついている』とすれば、いわんや社会科学においておやである<sup>20)</sup>とも書いているが、こういった箇所を読むと、丸山氏が学問の機軸を形成しつつ「政治——科学——文学」の三角関係を使ってスクランブルをかけつつ上昇しているような印象を私はもつ。私流に理解すれば、トー

マス・クーンの『科学革命の構造』<sup>21)</sup>におけるパラダイム変換のイメージである。

そう言えば、討幕伝言板を展開中に驚いたことがある。パラダイム変換の際によく起こるとされる出来事が連続して私達の身の周りに発生したのである。その意味で、T・クーンの『科学革命の構造』は、私塾“竜仙庵”の1年間にわたる“討幕プロジェクト”(1992年10月から1993年10月)の良き参考書となった。ということは、凡人、ましてや大学生にはパラダイム変換に“立ち会う”ことなどできない、という常識。もしそんな常識が成立しているのなら、そうした常識は再考する必要がある。なぜなら、大学教育のパラダイム変換に大学生が“立ち会っていない”，そんな大学教育のパラダイム変換などありえようはずがないからである<sup>22)</sup>。

最後にもう1点だけ、「授業中の私語」の問題を論じて本論を終わろう。1994年度は、4月から“竜仙庵流 楽々フランス語攻略”なるプロジェクトを半年にわたって展開した。参加者は40代社会人2名、20代新卒の社会人1名、大学2年生2名の5名で、出身・在籍大学数は5であった。“講師一流”“格安”“楽しい雰囲気”でフランス語を学んだのである。「講師一流」「格安」というのは、NHKのラジオ講座入門編(担当：古石篤子・慶応大学総合政策学部助教授)を使ったためである。“楽しい雰囲気”というのは、先生がCDラジカセの中にいるわけであるから、私語をしようが、寝そべって受講しようが、食事をしながらでも“叱られない”。肩から力が抜け、自然と楽しい雰囲気になってしまうのである。

入門編は1回20分、週4回であるから、1週1回90分の大学の授業より10分ほど短い計算になる。1993年10月からの実験プロジェクト(参加者2名)によって、勉強効果は同じ程度か、それ以上のものが期待できるのは分かっていたが、どういう聴講法が一番フランス語が身につくかをさらに実験しながら“攻略”したため(工夫は、いつも楽しいのに大学では学生は仲間外れ!)、最後まで攻略を続けた2名は、繰り返し聴講した時間が200時間を超えた。そうこうしているうちに、大学で行なわれている一般教育枠内の語学のほとんどは、教師と学生との間に単位を介在させることによって、教師「である」こと、大学生「である」ことを最優先させている疑いが極めて濃くなった。ラジオ講座の方が学習効果が断然に高いうえに、“私語”によって日仏比較文化論へ、大学教育論へ、といった具合に、大学教育が本来的に確保していなければならないものでありながら、いつの間にか稀薄になってしまった「自由な好奇心をもととした学問的な雰囲気」までもが“復活”したのである。みんなで学ぶ楽しみも満喫できた。

これらが意味するところは、大学教育を含む日本の教育全体の問題として重大である。大学3年生の同志にも参加を呼び掛けたところ、「ええ、フランス語ですか?単位を取ったばかりなんですから……」ということで、このプロジェクトへの参加は敬遠されてしまった。単位の出ない“竜仙庵流 楽々フランス語攻略”が一生涯にわたっての“知的財産”としてのフランス語学習であるのに対して、大学の一般教育で行なわれているフランス語は、子ども向け学校“教育”をイメージさせ、単位を取ったと同時に、そこから“解放”されて「ホッ!」となってしまう。受験英語が大学英語に昇格せず、哀れにも単位取りの道具として使われるのを最後に、その使命を終えるのと同じである<sup>23)</sup>。

それに対して“竜仙庵流 楽々フランス語攻略”は楽しい。楽しいのではあるが、合宿の折など



1週間分80分を1ラウンドとして、それが1日に3ラウンド、4ラウンドとなると、時々無性に眠くなってしまふ。こればかりは、どうにもならない。そして、こっくりこっくり始めた新卒社会人のMさんは周囲の目に気付いて言った、「授業というのは、『一生懸命聴かなくては』と自分に言い聞かせれば言い聞かせるほど、不思議と眠くなる。そんな時、私語をすると頭がスカットするのよね」。その瞬間、日本の大学教育というものが“私語の効用”の視点から逆照射された。それも“私語によって”である。私語を封じなければ成立しない授業、そんな授業を組み合わせたタコツボ型大学教育とは、いったい、何のための、また誰のためのものだったのであろうか？<sup>24)</sup>

## おわりに

私塾の観点から大胆に大学教育のモデルを呈示するなら、龍仙庵文庫を大地（基礎）として天に聳える大学教育という“大樹”をご想像いただきたい。その幹の部分に、討幕伝言板のような工夫・実践を使命とする“一般教育”が期待されていたのではなかったか。タコツボ型として出発した日本の大学の在り方そのものは、過去を振り返れば仕方ない面があった。しかし大学生サイド、つまり大学教育ならば、いくらでもササラ型にできたはずである。高等教育研究の成果から事態を鳥瞰すれば、教授サイドがいつまでもタコツボ型から脱却できないのは、ポスト・タコツボ型研究者集団と対になるはずの、ササラ型教育担当集団（教養部）というパートナーを実質的に欠くためということになるのだろう。だが、これでは大学教育はいつまでも、どこまでも教授サイドの問題でしかない。話の筋がおかしいのである。タコツボに、ササラ型の勉強がしたい大学生を押し込める権利があるかどうかは“大学生の意見抜き”“密室の教授会”で議論すれば事足れり、という性格のものでは本来ないはずなのである。大学教育研究者の側も、教授「である」ために大学生「である」ことを強いるがごとき大学教育に上積みして、自らが大学教育研究者「である」ために読者「である」ことを読者に強いるような論文ばかりを、いつまでも書き続けているわけにはいかない。現代の私塾を創造・発信させていただいた次第である。（追記：本稿を校正中に小島幸博氏から、同氏が大学に提出した卒業論文をもととした論文「電腦社会学 脱バーチャルリアリティー」が第10回電気通信普及財団賞のテレコム社会科学学生賞に入賞した、との報が入った。『無邪気な憂鬱』を一般教育に提出された卒業論文と考えるならば、従来の一般教育は自らを“自律したもの”と主張するには、あまりにダイナミズムが欠けていたように思う。併せて、およそ基礎研究とはシーズ（種）型をしているものであり、従来の大学教育研究自体がニーズ型の応用研究をもって基礎研究と誤認する傾向があったことの不幸も指摘しておきたい。）

以上

## 〈注〉

- 1) 関 正夫「教育評価の原理・方法に関する一考察」『大学論集』第20集、1990年、18頁。
- 2) Jean-Jacques Rousseau, 『社会契約論』 桑原武夫・前川貞次郎訳、岩波文庫、1954年、15頁。
- 3) Jean-Jacques Rousseau, 『社会契約論』 桑原武夫・前川貞次郎訳、岩波文庫、1954年、31頁。

- 4) 松尾 欣治『大学って、どんなところ?』龍溪書舎, 1985 として纏めたが、ルソーは使わずに B・パスカルの『プロヴァンシャル』を執筆モデルとして選んだ。
- 5) 丸山 真男『日本の思想』岩波新書 1961, 132~133頁。
- 6) 丸山 真男『日本の思想』岩波新書 1961, 24~25頁。
- 7) 福沢 諭吉『福翁自伝』岩波文庫 1978, 13~14頁。
- 8) 松尾 欣治「大学の原点としての私塾」『学校法人』学校法人経理研究会, 1994年7月より連載。
- 9) 松尾 欣治「大学の“閉じられ方”と“開き方”」『生涯学習の知識ネットワーク』山田達雄編著 学校法人経理研究会, 1993年。
- 10) Wolf Wagner, *Uni-Angst und Uni-Bluff — Wie studieren und sich nicht verlieren —*, Rotbuch Verlag, Berlin, 1977年。邦訳は『現代ドイツ学生気質』松尾欣治・川嶋正幸共訳, 龍溪書舎, 1984年。原則的に大学入試のないドイツと、そのある日本との類似が物語るのは、大学入試を中心に据えて教育論議を展開することの無意味さである。
- 11) 松尾 欣治「“学生による授業評価”に異議あり」『学校法人』学校法人経理研究会, 1993年6月。
- 12) 丸山 真男『日本の思想』岩波新書 1961, 138頁。
- 13) 丸山 真男『日本の思想』岩波新書 1961, 150頁。丸山氏はErnst Blochを念頭に置いていたのであろうか?
- 14) Emil Staiger, *Die Kunst der Interpretation*, Artemis Verlag, Zürich.
- 15) 松尾 欣治『国際化を前提とする個性化の条件』日本教育新聞社, 1990年。
- 16) 松尾 欣治『奇妙な説得力』(仮題)のタイトルで執筆中。
- 17) 林 義樹『学生参画授業—人間らしい「学びの場づくり」の理論と実践—』学文社, 1994年。
- 18) 小島 幸博『無邪気な憂鬱』学生問題総合研究所 卒業論文集
- 19) 丸山 真男『日本の思想』岩波新書 1961, 84頁。
- 20) 丸山 真男『日本の思想』岩波新書 1961, 116頁。
- 21) Thomas S. Kuhn『科学革命の構造』中山茂訳, みすず書房, 1971年。
- 22) 松尾 欣治「教育におけるパラダイム変換の試み」『一般教育学会第15回大会 講演要旨集』, 1993年, 10~11頁。
- 23) 松尾 欣治『大学って、どんなところ?』龍溪書舎, 1985年。
- 24) 松尾 欣治『日本型大学の誕生』日本教育新聞社, 1992年。

# An Attempt to make an educational revolution in Japan

## — By using the historical concept of *SHIJUKU* —

Kinji MATSUO\*

The modern Japanese system of education was imported from the West in the Meiji period. This old model was later updated with the introduction of American ideas after World War II. But in each case students were still obliged to study in a foreign manner.

Needless to say Japanese culture has its own style of education. And it is this style of education that is best suited to Japanese students. This form of Japanese education can be seen in the *SHIJUKU* (small private college of the Edo period) system. In *SHIJUKU* Japanese students were given the chances to show what they can do.

Despite superficial Westernization or Americanization, Japanese education has not been fundamentally Westernized or Americanized. Under such superficial Westernization or Americanization, misunderstandings can arise between teachers and students. For example, visiting foreign lecturers sometimes find it difficult to understand what Japanese students are trying to communicate since students often use nonverbal means to convey their message.

This is a serious problem. All teachers want their students to study in an academic manner. But lectures too are naturally conducted in a Japanese style. How can Japanese students study nonverbally in an academic manner? They are confused.

So, we must try to understand the major problems. In my view I think the *SHIJUKU* concept is helpful in this respect. By using this concept, we not only can find a solution, but we can also objectively discuss problems of Japanese colleges and universities.

The students themselves will have to work out a solution. However, since they have not been willing to discuss anything with members of a different generation little progress could be made. This has been the most serious shortcoming of the traditional style of Japanese education.

But Japanese students are recently beginning to discuss things more openly. If they concentrate on these problems, they themselves can find a solution using the *SHIJUKU* concept. Then, Japanese problems in higher education would be solved. As for the teachers, almost all their efforts to improve education have been in vain so far.

---

\*General Research Institute for Student Problems (Affiliated Researchers, R.I.H.E)

